

「互いに平和に過じなれど」

出エジプト21:22~25

ローマ12:9~21

(1)

17節「だれに対しても、悪に悪を報いることをせず、すべての人が良いと思うことを図らなれど」。

確かに理想的な生き方です。しかし、実際には、やられたら、やりかえしていません。どうか「目には目。歯には歯」というみ言葉(出エジプト22章は24節)は、「同態復讐法」と言いますが、実は、「私的復讐」(リベンジ)を禁じているみ言葉です。イスラエルの集落の町門に、長老が座っています。それが簡易裁判所の役割をしています。もしなにか訴訟すべき問題があれば、長老のところに行き、正しい判断をしてもらいます。私的判断を禁じていました。わたしたちの多くは、目に受けた被害を、目だけにとめておくことはできません。目には目以上を求め、しまいは、とんとんエスカレーターします。お互いは、それほど賢明でも、理性的でもありません。悪に悪を報いようとしています。「悪に対して悪を報い」は、残念ながら、抜きおし難いほどわたしたちの生き方として根付いています。

一見「悪に対して悪をまもって報い」は「これは理屈に合っているのみならず、しかもそれでは復讐には復讐と区別がつかない」といって復讐と区別がつかないことを主張する人もいます。

・福島県会津地方では、結婚相手が長州藩であることが、今でも結婚は成立しないとします。160年も前の恨みが尾を引いているのです。

・関ヶ原の闘いで敗れた毛利の家臣たちは、正月元旦に、250年間も、ひそかに江戸幕府転覆計画を考えていたといわれます。

・シエクスピアの三大悲劇の一つに、「ロメオとジュリエット」があります。モンタギュー家とキャピレット家とは大の犬猿の仲でした。そのため若い二人を悲劇に巻き込みました。

悪に対して悪をもって報いていけば、ついには、「悪魔に機会を与えよ」となる」と注意が差し向けられています。

「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りにまかせなさい。』復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする。』(19節)とあります。

(2)

ローマ12章9節以下には、さまざまなお話が言われています。しかし、要点は18節にあります。「あなたがたは、自分に關する限り、すべての人と平和を保ちなれど」。

いかに、すべての人と平和を保ちたいと願っていても、相手のあることです。相手が平和を願わなければ、互いに平和に過すことは出来ません。しかも、全ての人が平和に過したと願っていてもそれは限らなことです。

どうしたらいいのでしょうか。それは、18節

と勧められています。

互いに平和に過ごすことが大変であることを、
ペテロはよく承知していた。主イエスは、「平和を
与えたい人々」(ピテス・メイカー)の幸(「マ
タイ5:9)を言っておられます。

(3)

「コリント4章5節に、「あなたがたは、主が
来られるまでは、何についても、先走ったさ
ばきをしてはいけません。主は、やみの中の
隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりこ
とも明らかにされます。そのとき、神から各
人に対する称賛が届くのです」とのみ言葉が
あります。

「何についても、先走ったさばきをしてはい
けません」との注意は、わたしたちの手前勝
手な正義感から、しばしば、敵と味方を取
り違えることがあるからであります。「時
に先立ってさばきをする」と言われていま
す。

ドインの「ブルームハルト牧師」は、可能な
限りすべての人々と深い交わりを持ち、独自
の道を歩んだ人でした。なかでも、山上の説
教の「血」は、彼のうちにすそわたり、
血となり肉になったと言っています。

「神の禁止命令
を、自分の手でさばかな
く履きこなす神のみ許可はな
らぬことを言っています。

『コリント5章13節』「さばきをする人は、
強制的命令を、人々を、

『さばかなくつよ』という神の大いなる
寛容ではないか、「さばかなくつよ」は、
『もはや、さばく必要がない』ということな
のです。なぜなら、あなたにまかして、正し
くさばかれる主がおられるだから、「それに
先立ってさばきをするな」(「コリント4:5)
ということとです。

エペソ人への手紙6章1-2節に、「わたした
ちの格闘は、血肉に対するものではなく、主
権、力、「この暗闇の世界の支配者たち、また、
天にいるもう一つの悪霊に対するもの」です。
」との勧めがあります。

ここは、どうも口語訳のほうが分りやすいよ
うです。「わたしたちの戦いは、『血肉』(人間)
に対するものではなく、もう一つの支配と、
権威と、やみの世の主権者、また、天上にい
る悪の霊に対する戦いでありです」「即ち、
わたしたちは、人と人との闘いに終始しては
ならない、なぜなら闘っているわたしたち
の背後に、「もう一つの支配と、権威と、やみ
の世の主権者、また、天上にいる悪の霊に対
する戦い」があることに気が付くからであります。
」(「主」の祈りに)「試みにあわせませ
ん、悪より救い出したまえ」「と日々祈るやうに
促されています。

「悪」に負けては行けません。かえって、善をま
して悪に勝ちなことを「(一) (二) (三) (四) (五)
」まで徹底した勧めがなされている根本の理由
は、イエス・キリストが究極の勝利者である
からではないでしょうか。「世に勝つ者とはだ

れでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか」(イヨハネ5:5)

自らの手で復讐できないとすれば、誰がするのかわからない人がいます。それは結局、この世には、生ける神など存在していないと思ひ込んでいる人ではないでしょうか。もし、神不在とすれば、自分の手で復讐するしかありません。その思ひ込む者は、「復讐するは我にあらず」となります。

エペソ2章14節以下に、「キリストこそわたしたちの平和であり、二つのものを一つにして、敵意という隔ての壁を打ちこわし、御自分の肉において、敵意を廃棄されたお方です。それはまた、両者を一つだからだとして、十字架によって神と和解させるためです。敵意は十字架によって葬り去られました」との言葉があります。ここを間違って読んではいけません。キリストは、「あなたの敵」を滅ぼすためにこの世にきたのではなく、「わたしの内なる敵意」を滅ぼすために、敵の手にかかって十字架につけられたのです。

「敵意」は自分のものです。「獅子身中の虫」というではありませんか。相手に敵意を抱いておぼろげに「怒り」を覚えるならば、『怒り』を「心」の「上」に「奴」の「心」の「上」に「おぼろげ」を「心」の「上」に「おぼろげ」を「心」の「上」に「おぼろげ」を「心」の「上」に「おぼろげ」を生み出します。

そうしたわたしの内にある敵意を滅ぼすために、イエス・キリストは、御手と御足とに大釘をうたれ、心まで裂き、「上」に「タ」の十字架

に架かられたお方あります。「われはすでに世に勝つ」と主イエスはおっしゃいました。

19節に「愛する心と打ち、復讐は、わたしをすることである。わたしが報いをすべし」とあり、それに続いて20節以下に、「もし、あなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。乾いたなら、飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです。悪に負けてはいけません。かえって、善をもって、悪に打ち勝ちなさい」と

こうした勧めは、わたしたちの思いや判断をはるかに超えています。善意の上には、さらに善意を上乗せしてまでも、相手を祝福しなさいと言われていくからです。しかしこの生き方を実践すると何ともおめでたいお人よしの生き方になるかもしれません。生き馬の目を抜くように行動しなければ、この世間を渡り歩くことなどできないという方にとっては、物足りなく感じられるでしょう。それでも主イエスは、「蛇のようにはやい、鳩のようには素直でありなさい」とおっしゃいました。賢さと素直さとのバランスは大切です。ですから、みんなにお人好しだなーと言われても良い、そうするのによって彼の頭に燃える炭火を積むことになる「お」と言われておられます。

「頭に燃える炭火を積む」のたとえはどのような意味でしょうか。当時マッチなどありません。万が一、かまどの火が消えたら、隣の家から火の付いたままの炭を借りてくることがあります。そうまでしても、あなたの敵は、

暖を取らせてあげ、食物を与え、飲み物までも与えるように言われていることを意味されたのでしよう。難しの表現ですが、相手に体中が熱くなるような恥ずかしい思いをさせることを意味して言われたのだと思います。

使徒パウロが、願いと祈りをこめて、「コント教会のみなさんへ、最後の挨拶を差し向けようませう。」

「この御聖書のたすけをうたがえ、悪徳に対して悪報をうけるものにならないようにお祈りください。」

「主イエス・キリストの御名で祈ります。」

「最後に、兄弟たちよ。こしも喜びなさん。全業者となりなさん。互いに励まし合いなさん。思いを一つにこなさん。平和に過しなさん。そうすれば、愛と平和の神があなたがたと共にいて下さるであらう。きよい接吻をもって互いにあいさつをかわしなさん。主イエス・キリストの恵みと、神の愛と、聖霊の交わりとが、あなたがた一同と共にあるように」(コリント人への第二の手紙：1-7)。

先々週はブドウの樹の譬えでした。「とてつまる」「に注視しました。今朝は」出来の限り「自分に関する限り」「互いに平和に過しなさん」の勧めに注視しました。

「できる限り、平和に過しなさん。これは教会の交わりに限りませぬ。夫婦の間でも、家族の間でも、近所付き合いでも、職場でも、互いに平和を築くように努めてはなりません。」

【祈り】

天のお父さま。相手の出方がどういひはあきらませぬ。イエス・キリストを信じているもの